35th Anniversary
純パの会35周年
1982-2017

Pure Pacific 純パ No.191 May.2017

純パの会会報『純パ』第191号　2017年5月27日発行／発行：純パの会

ブーイングの複雑な心理

影山　一義

5月7日、メットライフドーム。埼玉西武ライオンズ対東北楽天ゴールデンイーグルス戦。今シーズン好調のイーグルスが両リーグ一番乗りとなる20勝目を挙げた日。イーグルスの先発・岸孝之投手の名前がコールされると、昨年まで彼が在籍していたライオンズのファンから岸に対して激しいブーイングが浴びせられた。それは試合前、試合中、そして勝利投手としてヒーローインタビューを受けている最中にも。もっといえば、前日の6日に発表された予告先発に彼の名前が出たところから、岸へのブーイングは始まっていた。

このブーイングに対しては、さまざまな意見が出た。ブーイングに対する否定的な意見。一方で、ライオンズファンとしては、やむなしという意見。いや、ライオンズファンでも、新天地で活躍する岸を応援してやるべきだという意見。実際、この日のメットライフドームには激しいブーイングを浴びせたファンもいれば「岸くん、おかえり」というボードを持って応援していたライオンズファンもいたという。私は、たぶんメットライフドームにいたら、とりあえず最初は岸にブーイングで"歓迎"していたと思う。しかし、岸に敗れた場合には、素直に讃えるべきではなかったかとは思う。

なぜ、岸は激しくブーイングを受けなければならなかったのか。その背景には、岸がフリーエージェント（FA）制度を利用して、地元ということはあるにせよ、よりによって、同一リーグのライバルチームに移籍していったこと。FA制度は選手の権利とはいえ、それでなくても、ライオンズはFAで流出する選手が12球団で一番多く、一方でFA選手をほとんど獲得しないフロント。ファンはそんな球団の対応に対して、少なからず怒りも感じていることもある（ブーイングは選手でなくフロントに向けろという意見もあったっけ）。

岸は、2006年に希望枠でライオンズに入団している。ライオンズが早くから彼の資質を見抜き、熱心に動向を追っていたこと。そして彼のあこがれだった西口文也投手の存在が入団の決め手だったと言われている。ちなみに、イーグルスは前年の2005年が最初のシーズン。イーグルスも地元の球団として誘いをかけていたが、叶わなかった。

2008年の日本シリーズでは、彼自身の活躍でライオンズの日本一に大きな貢献をした。その記憶は今でもライオンズファンには根強く残っている。その後着実にエースへの階段を上り、2014年、最初にFA資格を獲得した際には、3年契約を結び「生涯西武」とまで口にしていたという。そんな選手が、よりによって、同一リーグのライバルに移籍するなんて……

その背景にはいろいろと思うところがあっただろうが、ライオンズファンにとって「ライオンズの岸」がまさに偉大な存在だったことが、そのブーイングの大きさで、改めて証明をすることになったのである。

しかし、この試合には、一瞬だけブーイングを上回る、最高の場面があった。岸はかつてのチームメイトで主砲の中村剛也選手に真っ向勝負を挑み、場外ホームランを浴びた。ブーイングや過去の因縁なんてどうでもいい。エースと四番打者との力と力の勝負。勝ち負けだけではない、プロ野球を見ることの醍醐味。今後の対戦が楽しみな「名勝負」が生まれた瞬間だった。